

第6回8020童話賞

児童生徒の部「最優秀賞」作品

「不思議な歯磨き粉」

中学 3年生

今年も夏休みが始まった。

小学校一年のひろしは、この休みを田舎のおじいちゃんの家ですごすことになっていた。

「ひろちゃん、明日からおじいちゃん家にお泊りね、はいこれ。」

とお母さんがひろしに手渡した。

それは、小さなケースに入った旅行用の歯磨きセットだった。

ひろしが、中の歯磨き粉は……イチゴ？マスカット味が良かったなと眺めていると。

「見てたって歯はきれいにならないぞ、ちゃんとみがけよ、ひろ。兄ちゃんみたいな立派な歯が生えてこないぞ！」

と、兄のあきは口を大きく開け、自慢の歯を見せた。

あきは小学校6年生、この前「虫歯コンクール」で表彰された事を自慢している。

「ひろちゃんだって、毎日しっかりみがけばお兄ちゃんのようになれるわよ、さっしまつて、お支度は？」

お母さんはそう言いながら、ひろしの手から歯磨きセットを取り上げるとサッサとリュックの中にしまい込んだ。

「寝る前にしっかりとみがきして、仕上げはお母さんがするから。」

仕上げはお母さん。いつも寝る前になるとお母さんはそう言うのだ。

ひろしはこれが一番いやだった。

なぜかと言うと、お母さんに仕上げの歯磨きをしてもらっていると、きまってあきらが、

「小学生なのにな。」

と言ってくる。

ひろしは、お兄ちゃんだってお母さんにしてもらっていたくせに、と思うのだった。

「いいよ、自分でする。おじいちゃん家へ行くんだから。」

お母さんはしばらくひろしを見つめて、ふふっと笑い

「おじいちゃん家へ行くもんね。」

と言いながら、台所のかたづけを始めた。

ひろしが洗面所に行き、歯磨きをしようとおブラシ立てを見ると、いつもと違う歯磨き粉のチューブが置いてあった。

透明の水玉模様のチューブで、中の歯磨き粉は水色、向こうが透けていてこれまで見たことのない歯磨き粉だった。『スカッと爽快、虫歯を防ぐ宇宙味』と書いてあった。

宇宙味！どんな味だろうとキャップをはずした。ラムネのような甘いにおいがした。

ひろしは自分の歯ブラシに、ちょっとだけその歯磨き粉をつけてみた。

すると、

「ちょっと兄ちゃん、こっちの歯ブラシこうてや。」

後ろから聞きなれない声が出た。

ひろしがおどろいて振り向くと、ピンク色のカバが大きな青い歯ブラシを持って立っていた。

ひろしはびっくりして、腰をぬかさんばかりに洗面台の縁によりかかった。

「まあ、そうおどろかんと、こっちにつけてや。」

ピンクのカバは大きな口を開けカハカハと笑いながら、歯ブラシを差し出した。

ひろしは言われるままに、チューブを絞った。

歯ブラシが大きすぎてとてもこれではたりないと思ったのに、どんどん出てくる。

「まあそれくらいで、おねがいします。」

カバはそう言うと、歯を磨いてくれと言わんばかりに、大きな口を大きく開きひろしに向

けた。

ひろしがオロオロしていると。

「兄ちゃん早よしてや、眠たいねん。」

ひろしはおそろおそろ大きな歯ブラシを握り、カバの歯を磨きだした。

「上手にしてや、カ入れすぎんと、ああ、あんまりゆっくりもいかん、シャツシャと、調子よく……ええ感じや、歯の裏もちゃんとしてや……上手やね。」

カバはうつとりと眼を閉じている。

「仕上げはおかあさんやね、わしもちっちゃい頃はよおしてもらったわ。兄ちゃんはしてもらわんの？」

ひろしは

「ぼくもう小学生だから、自分で磨けるよ！」とムツとして言った。

「せやね、こんだけ上手なら大丈夫やね、おおきに。」

とカバは風呂場へと向かった。

「ダメお兄ちゃんが……」

ひろしは慌てて止めようとした。

「おい、ひろ、なにゴチャゴチャ言ってるんだ。」

兄のあきらが風呂から出てきた。

「おっ、早速使ったな。今日母さんと買ってきたんだ、新種だぜ。」

ひろしが手本を見ると、自分の青い歯ブラシを握っていた。

「さっさとゆすげよ。」

あきらに言われて鏡を見ると、口を泡だらけにした自分がいた。

そして、洗面台には、大きな口を開けて歯を磨くカバのイラストのついた、真新しい歯磨きのチューブが転がっていた。

(フッ素配合、はじけるラムネ味)

「ちゃんと磨けや！」

どこからかあのカバの声が聞こえた。